

「神に感謝しないではいけない」

～どん底から救われる私たちの人生～

「私はなんとという哀れな存在なのだろう。分裂してしまっていて、自分の力では決して良いことができなくなってしまった、死んだようなこの私を、一体だれが救い出してくれるだろうか。私たちの主イエス・キリストによって、神は私を救い出してくださったのだから、私は神に感謝しないではいけない。…」ローマ人への手紙7章24・25節現代訳

キリスト教が人間をどのように考えるか？人間は生まれながらにして罪人であると考えます。いわゆる、「性悪説」です。人間はそのままでは死んだものと考えます。しかし、そのことはキリスト教に限らず、すべての宗教や哲学の中でも問われるように、このままではいけない、どうにかしなければと考える部分は人間の中に備わっているように思います。だからこそ、お釈迦様も悟りを求めたわけですし、すべての人は悩み考えるわけです。

“人間は何のために生きるのか？”とある中学生が父親に質問しました。父親は“そんなことはお父さんには分からない。学校の先生なら勉強しているから、先生に訊いて見なさい。”と答えました。そして、学校の先生に同じ質問をしました。受験生だったその生徒に、先生は“お前、そんなことを考える前に、勉強しろ！”と言われてしまいました。実は真剣に悩んでいた彼は、その後、自殺してしまいました。

この例話を思い出しましたが、人間は少なからず、人生に悩み、苦しみながら生きています。そして、その答えが分からないまま、どうにか生きています。

パウロは「ああ、わたしはなんと惨めな人間なのだろう？」と自分の惨めさを嫌というほど自覚しました。それは、ユダヤ人であったために、律法にいきるといって真剣な生き方をしていたからでした。その律法はすべて聖なるもので、一つも重要でないものはありませんでした。細部に至るまで事細かに完璧に守ることを目指しました。それが少しでもできていないことで、自分がどうしようもない罪人であることを自覚させられました。そこまで私たちは意識して生きてはいません。だからこそ、惨めさをあまり感じません。もしも、それを感じ続けていたら、きっと私たちすべてはうつ病になってしまうでしょう。

しかし、パウロはキリストに出会ったことで、神の恵みの世界を知りました。自分を見るのではなく、キリストを見ることで、救われて、神の恵みに生きることができるようになりました。これは惨めさだけで満たされていた人にとっては、大いなる救いの世界となったのです。

ダビデはバテ・シェバとの不倫の罪を犯した後に、預言者ナタンと通して語られた神の言葉をきいて心から悔い改めました。その時に歌った詩篇51篇で、「神が求められるいかにえは、砕かれた魂です。砕かれ、悔い改めた心を、神は決していかにげんにはなさいません。」と歌いました。神様は私たちの心が神の前にへりくだっていることを求められます。罪を憎み、人を愛する主のご愛を私たちもきちんと理解する必要があります。